心の温度

第二十二回

文｜toshi
イラスト｜秋野 純子

○他者と「いい関係」を築ける先生とは

初任者から次のような声を聞いたことがあります。「子どもたちとはいい関係を築いていると思うのですが、一部の保護者とうまくいかず、悩んでいます」。話を聞くと、我が子の問題行動が見えず一方的に友達を攻撃する保護者、家庭の考え方を学級に押し付ける保護者、担任の指導を曲解し無理難題をねじ込んでくる保護者、感情の起伏の激しい保護者など、確かに新米先生が困惑する事例も少なくないようです。

ただ、そんな保護者とも理解し合えている新米先生がいないわけではありません。

例えばA先生は、子どものすばらしい言動があると、それを連絡帳に書いていました。「家庭でもほめてあげてください」ということでしょう。またB先生は、保護者に電話で連絡する用件があると、必ずその子のよい点を中心に認めたり喜んだりする言葉を添えていました。

C先生の場合は、思わずほほえましくなる事例がありました。C先生のクラスのお母さんが、私を見かけるとニコニコしながら寄ってきて、「toshi先生。C先生ってすごいなと思います。親だってなかなかできないですよ。それなのに、私より十歳も若いんですってね。とてもそうは思えません。私のほうが学ばせてもらっています」と言うのです。私は、(あら。四月には苦言をおっしゃることもあったのに)と苦笑いを浮かべてしまいました。とはいえ、うれしいことに変わりはなく、「C先生、すごいよ。保護者をも変容させたね」と喜び合いました。

こういう先生に共通して言えることがあります。まず、基本的に笑顔が印象的です。問題行動に対しては毅然と指導しながらも、受容的です。「君はそんな子ではない」とか、「この前はできていたではないか」とか、必ず子どもを認める言葉があります。ですから、子どもはいつの間にか笑顔に戻っています。また、情緒が安定しています。気分がよくないときもあるだろうに、たいしたものだと思ってしまいます。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。
それは子どもたちにとって最大の魅力。
「さあ！ その若さという武器を最大限発揮しよう」
toshi 先生から新米先生へのエールです。

＜ toshi 先生プロフィール＞
子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切にし、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35 年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

そのような先生を見ていると、単に「思いやり、やさしさ」などといった言葉では言い尽くせない何かがあるように思います。

○温かな心を育てる

あるとき、そんな新米先生のひとりであるD先生に、私は「D先生の学級経営を見ていると、先生のご両親がどんな子育てをしてきたかが見えてくるような気がするよ」と言ったことがあります。すると、D先生はこんな話をしてくれました。

大学生のとき、D先生は親に黙って食事を済ませて帰ったことがありました。でも、お母さんは、無断で外食をしてきたD先生を怒るのでなく、親である自分が、子どもが家で食事をしたくないようなことをしてしまったのではないかと、自分を責めて泣き出してしまったそうです。D先生はそれを見て、自分本位な態度を大いに反省したとのことでした。私は、こうして育まれた他者を思いやる心情が、教員になったとき、学級経営、児童理解に転移していくのだと感じました。

そして「思いやり、やさしさ」といった言葉では言い尽くせない何かについて、それは、《温かな心》ではないかと思うようになりました。

話は変わりますが、D先生の話を聞いて、私はリンカーン大統領の「四十歳を過ぎたら自分の顔に責任をもちなさい」という言葉を思い浮かべます。四十歳を過ぎると、品性、知性、教養などが顔ににじみ出るのだそうです。冒頭にふれた新米先生たちは、若いにもかかわらず、責任をもてる顔になっているのではないかと思いました。

しかし、私が若かった頃も含め、多くの新米先生はなかなかそういかないものです。それでいいのではないでしょうか。四十歳になるのは、まだまだ先ですからね。油断せず、だからといって焦らず、日々、目の前にいる子どもたちを相手に、心の修行を心がけていきましょう。

○心の修行とは

心の修行とは何でしょう。極端な話ですが、一例を挙げましょう。

例えば、暴力が当たり前の環境で育った子どもが大人になると、ほかの人にも暴力を振るうようになるのではないでしょうか。当人にとって暴力は、まるで空気のように自分になじんだやり方だからです。しかし教師は、暴力に頼らない指導法を身につけなくてはなりません。心の修行を要求されるゆえんです。もちろん、このようなことを言うまでもなく、多くの新米先生は暴力に頼らずやっていると思います。

でも、心の温かさとなるとどうでしょう。日々の忙しさに追われ、ついうっかり忘れてしまうのではないでしょうか。また、理屈ではわかっていても、幼少期から身についた行動や考え方の習慣、くせを脱するのは容易ではありません。そこで、修行が必要になってくるのです。

《心の温かさ》について、今一つ、補足をさせていただきます。

子どもは、先生を評するとき「やさしい先生」、「こわい先生」とよく言います。ですが、それは見た目のやさしさ、こわさではないことが多いようです。実際、子どもをよく叱っていても「やさしい」と言われる先生がいます。なぜでしょう。

子どもには、「心が温かい」という、抽象度の高い概念はまだ育っていないのです。そこで、心の温かさを「やさしさ」と置き換えているのです。逆もまた真なり。心が冷たいと「こわい先生」と言われるのでしょう。

最後に、今は子どもべったりの保護者が多いように思います。自己＝我が子になっているのかもしれません。ですから、子どもが先生を大好きなら、親も無条件で信頼するようです。

キーワードは、《心の温かさ》。そう思います。